

「この人この経営」第19回

異質な者が出会う葛藤と共感の中に



山形県東田川郡藤島町「藤島町土を考える会」

高橋浩さん(44歳)

〒999-7684

山形県東田川郡藤島町大字和名川字古田33

TEL.0235-64-2492

FAX.0235-64-4206

叶野幸衛さん(48歳)

〒999-7653

山形県東田川郡藤島町大字東堀越字五輪沢田263

TEL.0235-64-3578

FAX.0235-64-3578

飯鉢藤夫さん(53歳)

〒999-7631

山形県東田川郡藤島町大字八色木字平田97

TEL.0235-64-5598

FAX.0235-64-5598

●水田地域での 畑作野菜経営の創造

山形県の庄内地方に鶴岡市と酒田市に
はさまれて東田川郡藤島町という町があ
る。町政要覧によれば、町の経営耕地面
積は約3千600ha、そのほとんどが水
田という文字通りの稲作地域である。人
口は約1万2500人、世帯数約300
0戸の内、行政区分上の農家が約110
0戸を占めるという農家の町だ。とはい
え専業農家は54戸に過ぎない。藤島町が
求められている転作面積は25・6%の約
900ha。そこに、平成11年から加工
用パレイシヨの契約栽培をきっかけに、
水田地域での畑作的野菜経営の確立を目
指す集団がある。「藤島町土を考える会」
という生産組織を作り、カルビーポテト
との契約生産を行っている14名の稲作
農家と、それに呼応した一人の畑作農家
である。その母体となったのは複式簿記
の研究会から始まった「藤島町フロンテ
ィアクラブ21(FFC)」のメンバーだ。
彼らの取り組みは、単に稲に代わる
「転作」として始めた加工用パレイシヨ
の「生産」ではない。水田地域で田畑輪
換による機械化畑作野菜経営を実現する
ための地域営農システムの確立を目指す
「経営実験」に、自らのリスクで取り組
んでいるのである。麦や大豆など、行政
から与えられた明確な需要者も将来の展

望も見えない転作に満足するのではな
く、自ら顧客を求め、市場の要求に応え
ればこそ求められる経営を目指す、農業
経営者たちの「自己改革」へのチャレン
ジなのである。そのために地域の異質な
個性が力を合せる。さらには農産物需要
企業、技術提供メーカー、他地域の思い
を同じくする農業経営者たちに至るま
で、立場の異なる様々な人や企業が彼ら
のチャレンジに共感し協力を寄せてい
る。山形県農業会議の人々の協力もあつ
た。本誌も協力した文字通りの地域や業
界を越えた経営実験である。立場の異な
る者たちが、困難であつても甘えの無い
対等なパートナーシップを求めて、その
出会いと共同の中からこそ生み出される
未来に賭けているのだ。
まだ取り組み初年度の収穫も終わら
ず、先も確とは見えない99年の8月20
日に、「水田地域での畑作野菜経営の創
造」と題した実演研究会(主催…山形県
稲作経営者会議、山形県農業会議、藤島
町フロンティアクラブ21)を自ら呼び
かけて開催した。情報の限られた農家や
行政・農協関係者への情報提供と、自分
たちの目指す農業経営の未来への理解を
求めるためである。
需要者の立場で今回の取り組みに協力
したのはカルビーポテトだが、研究会に
は同社の了解も得て足立松源やセイツ
といった有力野菜卸にも参加を求めた。

さらに、経営実験の意図に共感する機械メーカーの協力で、水田での畑作経営を可能にする営農的基盤整備技術や大形畑作機械の実演も行った。

平成11年に13名14haで始まったこの取り組みは、翌年は10haに面積を減らしたものの、3年目の今年は15名に参加者を増やし約10haの生産を予定している。さらに、12年には大型ポテトハーベスタ、ポテトプランタ、カルチベータを導入して畑作機械装備を充実させた。また、加工用トマトやダダチャ豆など、新たな作物への取り組みと、それによる地域での就業の場を増やす試みも始まっている。

この事業の中心にいるのは三人の農業経営者だ。「藤島町土を考える会」の責任者でもある高橋浩さん（44歳・23号「農業経営者ルポ」で紹介）、地域で一人だけ早くから畑作農家として4・5haのバレイショ生産に取り組み、この事業を地域の畑作農家として支えてきた叶野幸衛さん（48歳）、そして、この困難な取り組みに仲間を誘い励まし続ける役割を果たしてきた飯鉢藤夫さん（53歳）という、全く個性の異なる三人の人々である。そして、想像する通り彼らの取り組みは容易なものではなかった。

●「みんな、甘いよ！」

平成11年の夏は記録的な猛暑が続い

た。例年だと藤島町で30度を超える日は数日しかないのに、その年は7月中旬から30度を越える日が1ヶ月以上も続いていた。最高気温が37度を超える日もあり、最低気温も25度に迫る異常な夏だった。8月20日に開かれる実演研究会の手伝いのために、筆者も18日から藤島町に來っていた。

19日夕刻。収穫はその日も終日行われていた。当日の予定作業がまだ終わっていない。最後のほ場は翌日の研究会で実演会場となる場所だった。暑かった日差しはすでに西に傾いた。でも、まだ手元は明るく作業を続けようと思えばできない時刻ではない。実演協力を願ったメーカーの4社15型式の機械も搬入を済ませ、すでにメーカーの人々や講師陣それに農業会議の人々は宿泊所に入っていた。作業終了後、メンバーを含めて顔合わせの食事を一緒に取ることになっていた。春に決めた予定では、8月の中旬までには全ての収穫作業を終了し、研究会開催はその打ち上げにすべく日程を決めたものでもあった。

6月末にバレイショの花が満開に咲きこぼれている頃に来た時とは皆の顔つきは全く違っていた。7月末から盆も休まずに続けてきた連日の作業に、誰の顔にも疲労の色が浮かんでいた。こんなはずじゃなかった

と思っている人もいたかもしれない。叶野さんを除けばこんなに働く夏は初めての体験だった。押し黙って作業が続く中、誰かが言った。

「後は明日の朝にするべ」

多くの人がその声に同調した。その時、温厚な人柄の叶野さんが珍しく声を荒げた。

「みんな、甘いよ！」

他のメンバーにとつてのバレイショは、やはり稲という本業があつての仕事だという気持ちが残っている。叶野さんはそれで飯を食っている。山ウド、アスパラガス、赤カブ、辛味ダイコン、ウルイ等の栽培とともに4・5haのバレイショ作りを経営の一つの柱にする、町で唯

一の畑作型の野菜農家なのだ。そして、叶野さんはこのプロジェクトに、自分の収穫を差しおいて機械持ちで参加しているのだ。

叶野さんの人柄と能力と経験を見込んでこのプロジェクトへの参加を求めた高橋さん、そして、仲間の調整役でもある飯鉢さんの顔が曇っていくのが見えた。

彼らの困難は暑さの中で続く作業の苦痛だけではなかった。皆にとつては始めてのイモ作り。転作の大豆作ならともかく、本格的な畑作の経験は無い。栽培経験の未熟さもあるが、それ以上に皆が超えねばならないハードルは、畑作経営に取り組むための意識の改革だった。

初年度であるその年は、叶野さんが所有する牽引式のポテトハーベスタ（東洋農機55）と茨城県の本誌読者である石川治夫さん所有の自走式ハーベスタ（東洋農機）を借りる形で始まった。植付けのためのプランタも同様だった。ところが、全国的な異常気象や段取りの狂いがあったため、石川さんの機械の搬入が遅れた。そのため、急遽、松山株からも機械を借りたりもした。作業が遅れば品質が下がったり単価も下がっていく。

収穫を困難にした最大の理由は碎土の悪さだった。碎土が悪いとハーベスタの選別部に土塊が拾い上げられ、それが能率を下げるのだ。ポテトハーベスタを使う畑作農家なら常識のことだろう。水田



平成11年8月に行われた「水田地域での畑作野菜経営の創造」と題した実演研究会には県内外から200名以上の人々が参加した。



平成11年8月20日、FFCが中心となって行った実演検討会には多数の企業の協力があつた。同時に、同研究会では同グループが取り組むバレイショを中心に水田での畑作野菜経営を実現する様々な機械の実演がなされた。写真は①レーザーブラウ、②レーザーレベラー、③明渠掘機などの田畑輪換を容易化する機械類（以上スガノ）から、④砕土を確実にするロータリ（松山）、⑤植付けのためのポテトプランタ（日農機）、⑥大豆にも有効なカルチベータ（日農機）、⑦同じく高畦培土器をセットしたロータリカルチ（松山）、⑧牽引式のポテトハーベスタ（東洋）および⑨タマネギ収穫とも兼用できるポテトのピックアップハーベスタ（松山）などが村井信仁氏の解説で実演された。

という土壌条件だけでなく、参加者各自に任された砕土の悪さが共同作業の収穫を皆を苦しめた。収穫作業の遅れが雑草を増やし、それがさらに収穫を困難なものにするという悪循環だった。畑は前年に大豆を播いた場所を使うことにしたが、水田土壌で土が崩れにくい。しかも、地域での転作消化という意図もあつて、借地できる場合が雪の降る頃にならないと特定できない。そのため、プラウやサブソイラでの秋起しで排水を良くしてお

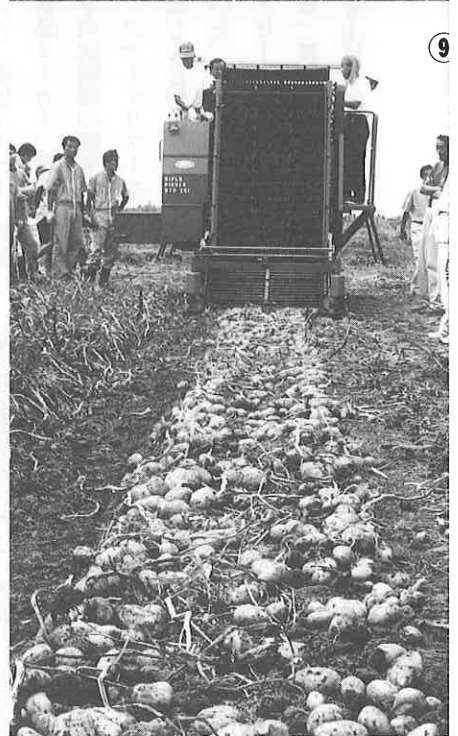
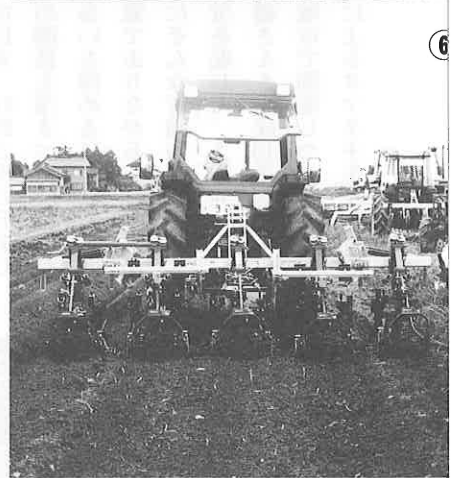
くことを徹底させられなかった。それ以上に、水を入れ代を置いて土を均すことに慣れた稲作農家である皆にとつては、畑作感覚での「砕土の徹底」といっても、まだ理解が不十分だったのだ。水田土壌を畑土壌に変えていくことが単年度では困難であるのと同様に、稲作という恵まれた経営環境の中で育ってきた稲作農家が、畑作、それも顧客要求に応える経営や技術センスを自ら獲得していくには、まさに苦しみの中で自己改革を必要と

したのである。先達者である叶野さんは、秋にプラウでの天地返しをすれば排水が悪い水田でもかなりのレベルで排水が改善できると、そして、自らも体験してきた砕土の悪さゆえの収穫の苦勞を皆に説明していた。特に、限られた機械で作業をこなさねばならなかったプロジェクト初年度は、皆の苦勞だけでなく叶野さん個人の経営にも相当の影響が出ていたはずだ。

● 同じ夢を見る、共に汗をかく仲間が欲しい

叶野さんは庄内農業高校の定時制に通い、春秋の農繁期休暇も家のわずかな水田では手が余るため、父親に連れられ住み込みの手間取り稼ぎに行った経験を持つ。大きな水田を持つ農家が羨ましかった。その悔しさから、一度は農業を捨てサラリーマンの道を選んだ。

しかし、慣れぬ営業の仕事に青春の挫折を体験して、約25年前、22歳で再び農業に戻った。水田を買おうとしても売る人など無い時代だ。また、それを買うだけのお金もなかった。米で食う道をあきらめた叶野さんは父親が取り組んでいたタバコへの特化を目指して1haの畑を買った。それが畑作農家としての始まりだった。一時期はタバコだけで1・2haも作った。仕事に追いまくられた。しかし、そのタバコ作りを通じて多くを学んだ。当時の専売公社で受けた講習も役立つ。無闇な拡大をするよりプラウやサブソイラで土壌管理を徹底することの価値も学んだ。畑こそ土壌管理の経営的意味を知り得たのだ。やがてタバコの規模を50aに縮小しても、10aあたり63万円というような生産と品質のレベルになると、苦勞して大面積を作っていた時代より収益が増えた。赤カブ、アスパラガス、ウド、ウリなど作物の幅も広がった。機



機械があれば可能なウドやウルの規模拡大、また、バレイショなどに取り組むに連れて機械化によって果たせる経営の可能性にも気付いた。

それは就農時から抱き続けてきた、大きな水田を持つ稲作農家に対する妬みの感情から解放されていく過程でもあった。他に選ぶべき道が無ければこそ歩んだ畑作への取り組みが自分の未来を開いていることに気付いたのだ。米農家はかりが優遇されているという妬みは、やがて恵まれた環境にいてもなお不平を言うことしかない寂しい人々と叶野さんの目には映るようになっていた。

村付き合いは普通にやってきたし、とくに煙たがられるようなことも無かった。しかし、村の農業から孤立していく自分自身の存在にも気付いていった。利益が上がりいかに経営の未来が見えようとも、それだけでは満たされない何かを感じ始めていた。作物の出来不出来、何で儲かったという話ではない。現在に

安住し時代に流されていくのはご免だ。でも、妻や家族以外にも、同じ夢を語り共有する課題の解決に共に汗をかける村の「仲間が欲しい」と思った。

これは筆者の推量だが、自分だけの満足ではなく、誰かを励まし、喜ばれ、必要とされる。またそれが自分を勇気付ける。仕事にも暮らしにも、そんな生きる意味のようなものを叶野さんは求めるようになっていったのではないだろうか。

「人の健康に害のあるものを作って儲けることに抵抗があった」と話す叶野さんがタバコ作りを止めた背景にもそんな思いがあったのだろう。タバコ栽培は、最高の売上を上げ、JTの表彰を受けたその年を最後に止めた。叶野さん自身のバレイショ栽培はその翌シーズンからだった。平成7年のことである。

● 様々な出会いがあった：

ちょうどその年の春、本誌が季刊発行からまだ10月号を出すか出さないかの頃

だったと思う。筆者は飯鉢藤夫さんから電話を頂いた。

創刊号からの読者である飯鉢さんから読者の集まりをするからお声を掛けて下さり、呼びかけをするので町内の読者リストを送れと言ってきた。あらためて読者リストを調べてみると、当時でも藤島町に10名以上の読者がいた。その時は迂闊にも存じ上げなかったが、叶野さん、高橋さんなど数名を除いて、多くは飯鉢さんの紹介で読者になっていたのだ方だったのだ。

その夏7月の8日頃だったと思う。始めて藤島町を訪ねると、叶野さん、高橋さんを含めて7、8名の方が集まっていた。そこに集まった人々も、合併前は農協も別だった叶野さんの名前は知っていたも、ほとんどの人にとっては初対面だった。軟弱野菜を作り毎日市場に出荷している高橋さんも、市場で見かけ会釈をする程度の仲で、話しをするのはそれが初めてだった。同じ町に住む農家が東京

を接点に出会うということに、皆が笑い、そして酒宴は特別の賑わいで盛り上がった。

その翌朝、叶野さんのバレイショ畑に案内された。北海道の美瑛の景色を彷彿とさせる傾斜のある畑一面に、白いバレイショの花が咲き乱れていた。

農協を介してある生協から生産依頼を受け、放棄されていた牧草地4haを借りて始めたバレイショ作りだった。本誌を通して、北海道メーカーの機械情報やカタログは集めていた。しかし、水田単作地帯である地元では、普及所も農協も農機販売店もそんな規模でのバレイショ作りの現実的情報を持っていない。カタログを見せても取り合ってくれない。やむなく、歩行型プランタ2台をトラクタのツールバーに取りつけ、それで4haを夫婦二人で植えたと言う。トラクタで使うにはホッパーが小さいので種や肥料の供給が大変だったはずだ。

その時、叶野さんから筆者に相談があった。叶野さんの相談は、ハーベスタの用意についてだった。地元の販売店では甘藷用として売り出されていたミニコンテナ扱いの甘藷用の自走式ハーベスタをテストしようと呼び出されているという。しかし、それでは作業能力的にも荷扱いの人手間も足りないはずだ。そこで、茨城県の本誌読者でバレイショの栽培にも詳しく、古い牽引式のハーベスタを持つ

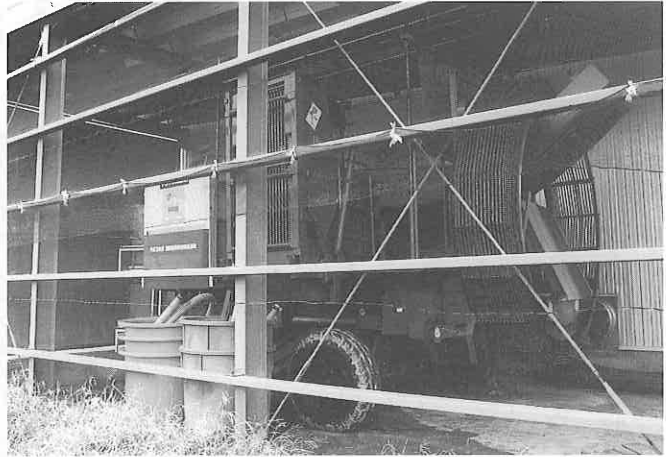
ている賃耕業者の石川治夫さんに協力を頼み、貸してもらったことになった。さらに、最初の生協からの話しは沙汰止みとなつてしまい、荷受も大型コンテナで集荷してもらい出荷先も石川さんに紹介を受けることとなった。そこでの取引は今も続いている。

石川さんには、トラクタをハーベスタにマッティングさせるためのタイヤ調達にも協力してもらい、何とかその年の収穫を終えた。しかし、旧式のハーベスタでの収穫は苦勞し、翌年、東洋農機から中古のハーベスタを購入した。

その後も、叶野さんは当社やスガノ農機が行う様々な研究会やイベントに参加し、各地の様々な農業経営者だけでなく、メーカーや買い手の業界人たちとの付き合いを広げていった。

また、あの夜以来、叶野さんとFFCのメンバーとの関係も深まった。特に高橋さんは付き合いを深めるにつれて、同じ町に住む農家でありながら、叶野さんの経営の背景にそんな行動力があつたことを知らぬ自分を恥じた。

そして、高橋さんも平成10年6月に本誌が茨城県結城市で開催した、府県での北海道型技術によるタマネギ生産と流通



牽引式ハーベスタやプランター、カルチベータなどの導入にあたっては北海道常呂町の小野寺俊幸氏や北海道農業機械工業会、東洋農機の協力があった。

をテーマとした『経営実験プロジェクト

会議』と題して行つた実演研究会に叶野

さんと併に参加した（これらの本誌研究

会については本誌14・16・22・28・31号

等を参照願いたい）。そこには、タマネ

ギにかかわる人だけでなく、全国から

様々な農業経営者、機械メーカー、野菜

卸、外食業、食品メーカー、肥料や農薬

の専門家、大学や試験場の研究者や普及

員、農協職員、ジャーナリストなどが来

ていた。そのほとんどが自費、個人の資

格で参加していた。しかも、参加者たち

からは多様なアピールや取引相手を求め

る声が出てくる。被害者意識を共有した

者同士が氣勢を上げるのではない。そし

て、異質な者であればこそ、自負心において振る舞う者であればこそ共感が産まれる。そして自らの経営のあり方が問われる場であつた。夜を徹しての交歓と議論の末、高橋さんは叶野さんのトラックに同乗して、興奮の余韻を道連れにして家路についた。

●「自己改革」としてのFFCの活動

高橋さんは、家族経営ながら(有)和名川ファームという法人を作り、若い頃からFFCの仲間達とお互いの経営分析に取り組んだりもしてきた。時には農協や行政の反発を受けながら積極的に米業界関係者に接し、個別のお客さんとの付き合いも深め、稲作農家としての経営者運動もしてきた。でも、それまでの米や稲作という文脈での集まりに対しては、たとえ大掛かりな集会でも、そこで語られる言葉に限界を感じ始めていた。そこで語られることの多くは、農政的な解決を要求するものでなければ、米価の行方や売り方のハウツーが語られるばかりで、やがてそれは自ら選んだ稲作経営の困難さをポヤク場に落ち着くというものだった。そこで出会う人々の話題の幅が狭くその厚みにも欠けるのは、参加する人々の同質性ゆえだとも思った。

そして、その年の夏以来、高橋さんの自分自身を含む藤島町稲作農家による自

己改革運動が始まった。これまで仲間と続けてきた「減反拒否」という姿勢への疑問を感じるようになってきたからだ。そして、振り上げた拳を下すにしても、それが経営的にも社会的にも意味ある提案になるようにしたかった。

高橋さんはその春から手が開いている限り叶野さんのバレイシヨ作りを手伝い、それを通して叶野さんに学んだ。そして、高橋さんはFFCの総会に叶野さんを講師に呼んだ。叶野さんの話を聞くうちに、いわば水田転作を200%やっている叶野さんと転作を拒否する高橋さんたちFFCのメンバーは、それぞれの場所での別の仕事をしていても、同じ未来を見ていたことに気が付いた。立場が違えばこそ、しかし、同じ目線で未来や経営を見ていればこそ、組める。と考えた。

その頃から高橋さん、飯鉢さん、叶野さんの三人から度々筆者に連絡が入るようになった。自分や仲間の農家が手掛ける様々な地元食材売込みの照会先や方法を相談してくる。しかし、それは単価の高い転作物探しやその売り先探しをするということだけではなかった。あくまで、自分自身を含めた地域農業の改革を目指すものだった。

さらに、(社)北海道農業機械工業会の村井信仁氏や筆者を藤島町に呼び、土作りについて、転作に向けた土壌改良、農業

改革についての研修会を行政や農協とともに開く。さらに、土門剛氏、カルビーポテトの山下明郎氏、土壌コンサルタントの関祐一氏など、本誌執筆者のほとんど全てを地元と呼びこんだ。和名川ファームはワガママファームだ揶揄されていたと自ら笑う高橋さんやF.F.Cのメンバーが、そして叶野さんである。全ては平成11年からのバレイシヨ作りを始めるための地均しであり自己改革のためだった。また、彼らの動きに対して、最初はいぶかしく思われたのだから行政や農協も好意的な反応をしてくれた。特に、県農業会議事務局の人々の協力が行政に対して有効な助けとなったようだ。

●腰を低くして 背筋をピンと伸ばす

「藤島町土を考える会」のこの取り組みには叶野さんと高橋さんという二人の人材がいて可能になった。そして、外部の共感と協力が必要だった。しかし、その出会いを演出し、さらに、地域の変化に向けて稲作りの仲間達をその気にさせて巻込んでいくには、飯鉢さんの存在が必要だった。

私事だが、こんな煙たいことを書き連ねた本誌を藤島町内だけで40名以上の方に普及させて下さったことを考えても、その人柄だけでなく、表には出さない強い信念を感じるのには、筆者のご都合主義

が言わしているのでは無いと思う。

筆者が飯鉢さんと始めてお目にかかったのは、平成6年7月15日、武田邦太郎前参議院議員が主宰していた「武田新農政研究会」でのことだった。その懇親会の席で「貴方が昆さんですか、読んでますよ『農業経営者』」とお声を掛けて下さったのだ。あの笑顔とともに、勇ましいことを書いていても挫けそうになっていた筆者にとつて、その笑顔と一言は何にも換え難い励みでした。藤島町でのこの取り組みにおいても、飯鉢さんはそんな役割を果たしているのだろう。

高橋浩さんは計数管理に長け鋭い情勢分析をする。言葉も巧みで指導力も包容力もある。叶野さんは無から自らの経営を打建てて来た強い信念と技術がある。そして、飯鉢さんは、そんな二人の出会いを作り、卵が雛に孵るのを信望強く見守り温め続ける孵卵器のような役目を果たしている様に思える。外部の人間に独特の嗅覚と直感において判断し、決して自己を主張しないが、人はいつのまにか飯鉢さんの言うことになっているのだ。



平成12年の年末の反省会。来年は10haの作付けをし、そこに新たに二人の若い後継者も参加する。

皆からすれば、時に理不尽とも思えるようなことを高橋さんが言っても、「浩の言うことは間違い無い。彼があれだけ一所懸命やってるんだからやってみようじゃないか」という飯鉢さんの言葉に皆が納得させられてしまう。

こんな全く個性の違う三人の共感と葛藤の中にこそ、「藤島町土を考える会」が取り組む事業の可能性があるのだ。もちろん、そこには他のメンバーたち、そして、商売の損得を度外視して協力してくれた、カルビーポテト(株)、スガノ農機(株)、松山(株)、日農機(株)、東洋農機(株)その他たくさんの企業人や個人たちもいた。

取り組み初年度には、あれほどの悪条件の中での苦勞と失敗の連続にもかかわらず、一人一時間千円の作業時給を取りながらも、まがりなりにも利益が出た。その年のイモの基本単価はキロ30円。あって北海道道南のレベルに合せ、品質によるインセンティブを付けるというものだった。

そして、前記のイベントも、他県の農業経営者や様々な業種の人々を含めて200人以上の参加者を得て開くことが出来、誇りある農業経営者たちが異業種、他地域の人々とともに作り出す水田地域の未来を予感させる会合となった。

今は「誰が儲かるか」なんていう時代ではない。それ以前に、本来の当たり前さをどう取り戻せるかなのである。そんな時代に自ら何を果たせるかを問える者にこそ未来があるのだ。この段階ではバレイシヨに取り組んだ彼らも、カルビーもスガノも松山も日農機も東洋農機も誰も儲けてはいない。そんな目先のことを考えてはいないのだ。利益は出さねばならない、しかし、それは目的ではなく結果であり手段なのだ。それを支援する人は、農業の中だけでなく様々な企業の中にもいる。農業経営者は小さな存在であっても、そんな企業や人々に、時代を切り開く対等なパートナーとして自らを鍛えなおしつつ協力を求め、必要なのだと。

(昆 吉則)